

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2023

課題番号：17K02604

研究課題名（和文）フランス19世紀文学における信仰とライシテの相克―棄教と回心の系譜学―

研究課題名（英文）The Conflict between Faith and Laicite in French 19th century literature: a genealogy of apostasy and conversion.

研究代表者

江島 泰子（ESHIMA, Yasuko）

日本大学・法学部・特任教授

研究者番号：80219261

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000 円

研究成果の概要（和文）：二つのシンポジウムへ参加し、その成果である二冊の図書にそれぞれ論文を掲載した。それ以外に、単著論文四本を二つの学会誌および所属機関の紀要に発表した。ルナン学会主催の二度の大会（於：パリ）で発表を行った。最初の発表は、ルナンの日本における受容と関わり、『ルナン研究』に掲載された。二つ目の発表（2023年11月）では、宗教史家としてのルナンについて独自の考察を行った。今後『ルナン研究』に掲載される予定である。研究の集大成として一冊の図書の上梓を企図したが、体調悪化により年度未までに完成できなかった。科研費の補助を受けた研究の主要な成果のひとつであるため、出版に向けて作業中である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国際ルナン学会において、宗教とライシテに関連する発表を二度行い、論文として公表することで、宗教思想家としてのルナンの特徴について独自の角度から見解を示せたことが一つ挙げられる。また研究当初から掲げていた死刑廃止に関するテーマにそって、ユゴー、社会主義者ジョレス、フランスで死刑廃止が実現した当時の司法相バダンテール、それぞれの死刑に関する言説を考察した結果、フランスにおける死刑廃止論はライシテや反ユダヤ主義のテーマと深くかかわっていることを検証できた。フランス死刑廃止論の系譜における多様な接合点を提示することで、死刑問題の考察に新たな視座を提供しえた。

研究成果の概要（英文）：I participated in two symposia and published a single-authored paper in each of the two books that resulted from the symposia.

In addition, four single-authored papers were published in two journals and in the bulletin of my institution. I gave presentations at two congresses organised in Paris by the Society for Renan Studies. The first presentation concerned the reception of Renan in Japan and was published in Renan Studies. The second presentation (November 2023) provided an original reflection on Renan as a historian of religion. It will be published in Renan Studies in the future.

I planned to publish a book as the culmination of my research, but due to my deteriorating health this year I was unable to complete it before the end of the year. As it is one of the main results of the research supported by the Grant-in-Aid for Scientific Research, I am working on the publication.

研究分野：19世紀フランス文学

キーワード：フランス文学 19世紀 キリスト教 ライシテ 死刑廃止論

1. 研究開始当初の背景

フランスの社会政策の基本原則であるライシテに関しては、フランスはもとより日本でもいくつかの優れた研究書が出版されているが、政治学や社会学等の見地からのアプローチが主流である。一方この原理の成立過程を見ると、政教分離の主張は19世紀初頭すでに思想家や作家によってもなされていた。その主張は個々の作家における宗教的葛藤とともに反教権主義思想とも不可分につながっている。本研究に先立って、*Le Christ fin de siècle* (Du Lerot, 2002年、日本語版は『世紀末のキリスト』(国書刊行会, 2003年)および『「神」の人 —19世紀フランス文学における司祭像』(国書刊行会, 2015年)の二つの図書において19世紀ロマン主義から世紀末にいたる作家たちのキリスト教信仰の在り方を取り上げてきた。この業績を基礎として、対象作家を拡大しつつライシテを文学分野でどのように解釈しうるかを検討することで、より発展的な成果をえることを企図した。

2. 研究の目的

本研究は、社会学などの文学以外の分野の成果をも参照しつつ文学や思想の原テクストを精緻に分析することで、キリスト教信仰とライシテの錯綜した関連性を解き明かすことを目的とした。文学研究のアプローチを通じ、ライシテの原理が潜在的に有していた、他者を受容する叡智への希求を明らかにしたいと望んだ。

3. 研究の方法

以下の項目を中心として、研究を推進した。

- (1) 文献の収集と分析
- (2) 国内外の研究協力者・その他の研究者との提携
- (3) 国際ルナン学会での大会立案と発表
- (4) ルナンの草稿研究
- (5) 社会・国民への発信

4. 研究成果

以下に「研究の方法」に沿って経過を記し、その後に全体を総括する。なお具体的成果としての論文・図書については、「参照」項目にあるA～Gの番号と対応している。

(1) 研究の方法に沿っての成果報告

①文献の収集と分析については、社会学、キリスト教、思想家・作家(アルフレッド・ド・ヴィニエー、ピエール＝シモン・バランシュ、モーリス・バレス、ジャン・ジョレス、ジャック・マリタン等)関連の図書・論文を、フランス国立図書館(フランソワ・ミッテラン)での資料検索、書籍およびGallicaとRetroNews(フランス国立図書館データベース)やその他のサイトを通じて収集し、図書・論文作成に利用した。

②国外の研究協力者との提携については、*L' Israël de Renan* (『ルナンのイスラエル』, 2005)の著者であると同時に、*La Bible de l' Humanité* (ミシュレ『人類の聖書』)の最新版の編者であるローディス・レタ氏(リヨン第二大学名誉教授)、オーギュスト・コントの専門家でライシテの問題およびジャン・ジョレスにも詳しいジュリエット・グランジュ氏(トゥール大学教授)、ユゴの専門家であるデルフィーヌ・グレーズ氏(グルノーブル大学教授)、モーリス・バレス

の専門家であるクレール・エベック氏（ソルボンヌ大学名誉准教授）と会談して情報交換するという計画を立てていた。手術およびコロナ禍の影響により渡仏できない時期があったものの、計画通りフランスの研究者それぞれと一回以上の面談の機会をもち、有意義な知見をえて、論文および書籍の作成に役立てることができた。

国内の研究者との協力については、2017年10月に慶應義塾大学の高橋和巳氏が主宰し、同大学の学事振興資金の助成を得て開催されたシンポジウムに参加し、その成果は、『デリダと死刑を考える』という共著に結実した（「参照」に記載したA）。死刑問題に関しては、「ユゴー、ジョレス、バダンテールの死刑廃止論を発信していく」ことが本研究の当初計画に盛り込まれていた。したがって掲載論文「ヴィクトール・ユゴーの死刑廃止論、そしてバダンテール―デリダと考える」は、共著としての体裁も関係して科研費研究であることを明記はしていないが、科研費の枠組みに包含される内容である。さらに2018年1月に南山大学の吉澤英樹氏および柳沢史明氏が主宰して開催された日仏シンポジウム「アフリカ・カトリシズム・文化相対主義―ライシテの時代におけるプレーモダンの相対主義」に参加し、『混沌の共和国 「文明化の使命」の時代における渡世のディスクール』という共著に結実した（「参照」に記載したB）。このシンポジウムへの参画は、歴史の進歩としての「文明化」というテーマのもとユゴーおよびルナンを考究する機会となり、本研究に新たな視座を提供してくれた。

③ 国際ルナン学会での大会立案については、2018年の「ルナン学会五〇周年記念大会」ではライシテをテーマにすることはできなかったが、「ルナン作品の日本への導入―脱宗教化されたキリスト像と近代化黎明期の危機意識へのその投影」と題して発表（於：パリ）を行い、発表に加筆・訂正を加えて2021年『ルナン研究』第121号に掲載された。次いで2019年以降の年次大会と記念大会の立案を行う総会・理事会に参画して、テーマをライシテとすることを目指した。2022年にオンラインで開催された総会の協議の結果、「諸宗教とライシテ」が「ルナン生誕二百周年記念大会」（2023年）のテーマとなった。その大会では「ルナンによる預言者は社会主義者の先祖なのか？―ジャン・ジョレスのコメントに照らして―」と題して発表（於：パリ）を行った。この発表は、『ルナン研究』124号に掲載される予定である。

④ ルナンの草稿研究に関しては、フランス国立図書館に所蔵されているルナンの草稿（*Ernest et Beatrix*, 『エルネストとベアトリクス』など）を学会メンバーと翻刻する計画を立てていたが、コロナ禍と手術およびその後の経過が相まって長期間にわたって渡仏がかなわず、草稿研究は他のメンバーに依託する結果となった。代わりとして、勤務校が所有するサン＝シモン・コレクシヨンの草稿翻刻に着手して、所属先の紀要に掲載した。

⑤ 社会・国民への発信に関しては、国内では所属学会であるキリスト教文学会、国際表現学会、所属研究機関の紀要で発表および論文掲載を行った（「参照」に記載したC, D, E, F）。国外では国際ルナン学会での口頭発表、『ルナン研究』への論文投稿によって研究成果を公表した（「参照」に記載したG）。これは当初の研究計画に沿ったものであった。

(2) 当初予期していなかった諸点について

① 当初は企図していなかった2件のシンポジウムの提案を受けた。他の研究者と提携をしながら広範な発信を行うべく参画した。

② 当初の立案では、公表した論文をまとめて一冊の書籍として出版することを目指していた。ところが、2018年のルナン学会の大会における発表をもとにした論文「ルナン作品の日本への

導入」(本学会五〇周年記念大会であるため、学会としての調整により決定)および他の研究者が主宰したシンポジウムがもとになった二つの共著(『デリダと死刑を考える』、『混沌の共和国 「文明化の使命」の時代における渡世のディスコース』)に掲載された論文は、一冊の著書を構成するにはその他の論文との整合性に欠けることが懸念された。

そのため、研究成果の一部をなす単著に関しては新たに構想を練る必要が生じた。「信仰と儀礼の総体による聖性の管理」というヨーロッパ起源の宗教の一定義(ジャン・ボベロ)を念頭に考察すると、ジャック・デリダの『講義録 死刑 [I]』におけるユゴー言及は、19世紀の作家における反教権主義とライシテの通底関係を示唆しており、ユゴーの死刑廃止論を新たな角度から考究する可能性が浮かび上がってきた。社会主義の政治家ジャン・ジョレスの哲学・宗教思想を検討するなかでユゴーから受けた影響を発見したこと、フランスで死刑廃止が実現した当時の司法相であったバダンテールにおけるユダヤ教とユダヤ人をめぐる問題の検討が当初から研究テーマの一つとして予定されていたこと、この問題系では政教分離法の成立に関してドレフュス事件が大きな影響を及ぼしていること等に鑑み、ユゴーの死刑廃止論とライシテの関連性を出発点として、ジョレスからバダンテールへと続く一系譜を拡大した枠組みでとらえなおして考察することをもって一冊の著書とすることを旨とするに決した。

研究終了年度である2023年秋より体調が著しく悪化して出版社への原稿提出が遅れ、年度末までに研究成果として単著を出版するにいたらなかった。その結果、出版助成費用として未使用にしておいた金額を学術振興会に返却した。すでに提出済の原稿は出版に向けての作業に入っており、出版社と協議して契約書を新たに交わし、出版を行うことにした(仮題『死刑廃止の一系譜—ユゴー、ジョレス、バダンテール』、国書刊行会から出版予定)。2024年2月にも入院等の予期せぬ支障が生じたため遅滞しているが、なるべく早期の出版を目指す。

③「諸宗教とライシテ」がテーマとなった「ルナン生誕二百周年記念大会」(2023年11月)では「ルナンによる預言者は社会主義者の先祖なのか?—ジャン・ジョレスのコメントに照らして—」と題して発表を行った。この発表は、今後に発行される『ルナン研究』124号に掲載される予定である。ほとんど研究されてこなかったジャン・ジョレスとルナンの関係を取り上げ、ジョレスのルナン観を参照しつつ『イスラエル民族史』を論じている点で、この論文は新機軸を呈するものである。

「参照」

- A. 「ヴィクトール・ユゴーの死刑廃止論、そしてバダンテール—デリダと考える」、江島泰子、『デリダと死刑を考える』、白水社、pp. 71-97, 2018.
- B. 「転換期のディスコース—ライシテ (laïcité) とフランスの優位性」、江島泰子、『混沌の共和国 「文明化の使命」の時代における渡世のディスコース』、ナカニシヤ出版、pp. 33-64, 2019.
- C. 「アンベール・クレリザックにおけるキリストと聖パウロ、そして教会—キリスト教における脱宗教化の一考察」、江島泰子、『国際文化表現研究』、15号、pp. 1-16, 2019.
- D. 「ヴィニー『ダフネ』における脱宗教性」、江島泰子、『キリスト教文学研究』、37号、pp. 61-73, 2020.
- E. 「社会派詩人ヴィニー?—「脱宗教化」から見たサン＝シモン主義との接点をめぐって」、江島泰子、『桜文論叢』(日本大学法学部)、102巻、pp. 1-31, 2020.
- F. 「バランシュにおける “現行のエポプティスム” と死刑廃止論」、江島泰子、『国際文化表

現研究』, 17 号, pp.100-116, 2021.

G. Yasuko Eshima, Introduction des œuvres de Renan au Japon. Une figure laïcisée du Christ, son miroitement dans des consciences en crise à l'aube de la modernité, Études renaniennes, 121, 161-183, 2021.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件／うち国際共著 1件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Yasuko Eshima	4. 巻 121
2. 論文標題 Introduction des oeuvres de Renan au Japon. Une figure laicisee du Christ, son miroitement dans des consciences en crise a l'aube de la modernite	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Etudes renaniennes	6. 最初と最後の頁 161, 183
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 江島泰子	4. 巻 102
2. 論文標題 社会派詩人ヴィニー？「脱宗教化」から見たサン＝シモン主義との接点について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 桜文論叢（日本大学法学部）	6. 最初と最後の頁 1, 31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 江島泰子	4. 巻 17
2. 論文標題 バランシュにおける「現行のエポプティズム」と死刑廃止論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国際文化表現研究	6. 最初と最後の頁 104, 120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江島泰子	4. 巻 37
2. 論文標題 ヴィニー『ダフネ』における「脱宗教性」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 キリスト教文学研究	6. 最初と最後の頁 61, 73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江島泰子	4. 巻 15
2. 論文標題 アンペール・クレリサックにおけるキリストと聖パウロ、そして教会—キリスト教における脱宗教化の— 考察—	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国際文化表現研究	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件／うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Yasuko Eshima
2. 発表標題 Le prophete renanien ancetre des socialistes ? a la lumiere des commentaires de Jean Jaures
3. 学会等名 Societe des Etudes renaniennes（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 江島泰子
2. 発表標題 アルルレッド・ド・ヴィニーにおける脱宗教性—ダフネを中心に
3. 学会等名 日本キリスト教文学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yasuko Eshima
2. 発表標題 L'introduction des oeuvres de Renan au Japon-une figure laicisee du Christ, son miroitement dans des consciences en crise a l'aube de la modernite
3. 学会等名 Societe des Etudes renaniennes（国際学会）
4. 発表年 2018年

1．発表者名 江島泰子
2．発表標題 ヴィクトール・ユゴーの死刑廃止論、そしてバダンテール—デリダと考える
3．学会等名 「デリダと死刑を考える」（慶應義塾大学学事振興資金助成）
4．発表年 2017年

1．発表者名 江島泰子
2．発表標題 転換期のディスクール—ライシテとフランスの優位性
3．学会等名 日仏シンポジウム「アフリカ・カトリシズム・文化相対主義 ライシテの時代におけるプレ・モダンの徴表のゆくえ」（科学研究補助金）
4．発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1．著者名 高桑 和巳，石塚 伸一，江島 泰子，梅田 孝太，増田 一夫，鵜飼 哲，郷原 佳以	4．発行年 2018年
2．出版社 白水社	5．総ページ数 270
3．書名 デリダと死刑を考える	

1．著者名 江島泰子，鈴木重周，長谷川一年，吉澤英樹，ラファエル・ランバル，柳沢史明，ロリック・ゼルビニ，砂野幸稔	4．発行年 2019年
2．出版社 ナカニシヤ出版	5．総ページ数 290
3．書名 混沌の共和国—「文明化の使命」の時代における渡世のディスクール	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6．研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------